

『聖レオナルド伝』にみる叙述の定型表現

小野賢一

はじめに

紀元千年頃のフェーデが横行する封建社会に対抗すべく、教会が中心となって神の平和 (Pax Dei; Paix de Dieux) 運動が開始された。その中心地のひとつのリモージュ司教管区では、司教の主導の下で信仰と秩序維持の拠点として司教座 (cathedra) に次ぐ規模のサン・レオナルド参事会教会 (egise collégiale) が整備された。参事会教会を支柱とする秩序維持は、かつてルイ敬虔帝の下で国制のなかに導入されたものである。このカロリング朝の遺制を、王権のヘゲモニーが及ばぬミレニアムの南西フランスの辺境のリモージュで復興するために、司教の主導の下で新たな信仰の拠点を創設するにあたって、聖人がその地に確かにやって来て布教活動を行い、聖所を建立し、その地で没したという由縁を記した聖人伝が編纂された。

古代のローマ帝国の時代以来、聖人伝 (agiographia) はキリスト教徒の共同体の共通の記憶を留めるべく、ローマ帝国の殉教者の裁判記録に基づき編まれた Acta と、キリスト教側からの受難の記録に基づき編まれた回覧書簡の *passiones* が編まれたが、やがてそれらの禍々しい記憶をキリスト教徒の共同体の共通の記憶として想起し、追悼し、朗読する (legere) ための文書という意味で聖人伝は *Legenda* と呼ばれるようになった。一世紀前半に『聖レオナルド伝』は共同体の霊的読書⁴のために編まれたものである。その序文には、まさに *Legenda* としての聖人伝の機能について言及されている。

だが、聖人伝の機能はそれだけではない。ゲルマン人の大移動以来、図像を用いて布教を積極的に進めてきた西方教会ではあったが、聖人崇敬が無秩序に行われないように統制するという課題が残されていた。この課題に叙述と論証をもって応え、聖人崇敬を認定させるための書類としての機能も聖人伝は備えていた。サン・レオナルド参事会教会はレオナルドという聖人に奉献された聖所であったため、その崇敬に正統性を付与することを目的として『聖レオナルド伝』は編纂された。それゆえ表現形式の面で細心の注意が払われている。一神教と多神教の関係、位格の関係は特に厳格に定義され、叙述のなかに盛り込まれた。このような厳格な表現形式は、紀元千年頃、異端問題に直面していたリモージュ教会⁷⁾にとつて、物語の力を借りて西方教会の正統教義にレオナルドが適合する人物であることを論証する試みであった。

先行研究では、列聖（聖人認定）における聖性の証明の機能のなかでも、とりわけ德行・英雄性・奇蹟による判定に関する問題に焦点を合わせて論じられてきた。本稿では、『聖レオナルド第一伝記』(一世紀前半成立)を素材として、一神教に於ける聖人の位置づけと位格の相関関係に関する叙述に焦点を合わせて、聖人伝による聖人の正統性証明のための定型表現に関するひとつの具体的事例について明らかにしたい。紀元千年頃の封建社会のなかで王権のヘゲモニーの及ばぬ南西フランスの辺境リモージュ⁸⁾においてさえも、教会権力は確固たるドクトリンのもとで統制を図っていたことが理解されよう。

すでに先行研究において筆者は『聖レオナルド第一伝記』の獨創性について、都市リモージュのキウイタス所在の司教座とブルガス所在のサン・マルシアル修道院との対抗関係で、リモージュ司教がサン・マルシアル修道院に対抗させるために整備したのが、サン・レオナルド参事会教会であり、その創建者の伝記として編ま

れたのが『聖レオナル第一伝記』であること、『聖レオナル第一伝記』は『聖マルシアル伝』の対抗文書としての側面、即ち党派的パンフレットとしての機能も併せ持っていたことを明らかにした。本稿では全く逆の側面を検討したい。即ち決まり文句を特定の聖人に当てはめただけであって、歴史研究を進めるうえで何も明らかにしない不純物としてこれまで顧みられなかった『聖レオナル第一伝記』の定型表現を集中的に取り上げてみたい。これらの表現が聖人伝の叙述のかなりの部分を占めることをあらためて思い知らされるであろう。中世の聖人伝の古代の公会議以来の伝統墨守の保守性と、現実世界の権力関係に向き合った獨創性という二面性の併存を先行研究¹⁰と照らし合わせて考察することが本稿の課題である。

第一章 古代末期のヒッポのアウグステイヌスによる定式の西欧中世世界への継受

古代の聖人伝は、殉教の証言の記録が多かったが、西欧中世では古代のような殉教は減り、殉教の証言ではなく、徳行・英雄性・奇蹟の証言が聖人認定の基準として重視された。西欧と異なり、ビザンツ帝国では、首都コンスタンティノープルはキリスト教の聖書の登場人物が活躍した地域に近く、彼らにまつわるとされる聖遺物を獲得する機会に恵まれた。一方で西欧世界は聖書の登場人物が活躍した地域から遠いため信仰に必要な聖遺物が不足していた。この問題を解消すべくアンブロシウスの主張を理論的支柱として奇蹟によって新たな聖人崇敬を創出するという試みが西欧世界では取り入れられた。アウグステイヌスは、アンブロシウスの主張をさらに敷衍しつつ、「わたしたちはその記念堂のなかに祭壇を設けて殉教者に犠牲を捧げるようなことはない。犠牲は、殉教者と私たちとの唯一の神にささげられるのである」そして「たとえ記念堂において犠牲を

ささげるとしても、それは殉教者たちをたいしてではなく、神にたいしてささげるのである」と述べた¹¹。さらにアウグステイヌスは「それでは、わたしたちは、奇蹟の業をなすどのような者を信じたらよいのであるか」と問いかけ、「これらの業をおこなった人びとに神々と認められることを欲する者たち」ではなく「自分の名誉をも聖なるものとなすことをのぞまず、かえって、正当にたたえられてよいすべての業を、そのかたの栄光となす人びと」を信じるべきであるとする¹²。『聖レオナルド第一伝記』に於いて次の如く古代の教父たちの主張は継受されている。

従つて前に聖書が述べたように、光（聖人）は暗闇で隠すことはできないので、そして山の上に置かれた町（聖人）は隠されることはできないので、神の聖人レオナルドは人々の多さから遠ざかり、そしてしばしば前に述べられているように、孤独の生活を好むようになったけれども、それにもかかわらず、神は彼の聖人たちのなかにあつて輝くので、そして聖人たちを通して神は人々のなかで奇蹟を行うので、神の促しで、病人たちの限らない群れがレオナルドのもとを訪れた¹³。

ヒッポのアウグステイヌスの定式に従つて『聖レオナルド第一伝記』では上述の如く「聖人たちを通して神は人々のなかで奇蹟を行う」(et per eos in gentibus facit mirabilia) という表現で奇蹟は唯一全能の神の力であることが明確に規定されている。さらに奇蹟が聖人ではなく、神の恩寵に拠ることが『聖レオナルド伝』に記されている。

そしてそれらの群れを全能の神の恩寵は神の信徒レオナルドを通して癒した。そして実際、彼の聖性に対する名声は、アキテーヌ中に広められ、そして全ブリタニアにもそれに劣らず広められた。さらにゲルマ

ニアまでずっと広められた。¹⁴

この文書には「全能の神の恩寵は神の信徒レオナルを通して癒した」(quae per suum fidelem curabat omnipotentis Dei gratia)と記されている。超自然現象の多彩な叙史的表現に目を奪われがちだが、ヒッポのaugustinusの定式の継受によって物語の多彩さに統一性が与えられていることがわかる。

第二章 位格の相関関係に関する叙述

第一章では奇蹟と唯一全能の神の關係について検討したが、本章では古代の公会議で特に問題とされた位格の相関關係に関する叙述について考察したい。最初に第一位格と第二位格の關係、次に第一位格と第三位格の關係に関する叙述について検討し、最後に各位格の相関關係に関する叙述について検討したい。まずは第一位格と第二位格に関する叙述について考察する。

なぜならば、あなたの息子の私たちの主イエス・キリストの（次の）最も神聖なことばを通して十二使徒と他のキリスト教徒にあなたは述べて約束した。「私の名においてあなたが父なる神に請い求めるものをあなたに彼は与えるだろう」¹⁵

『聖レオナル第一伝記』では第一位格と第二位格の關係に関して「私の名においてあなたが父なる神に請い求めるものをあなたに彼は与えるだろう」(Quodcumque petieritis Patrem in nomine meo, dabit vobis)というイエスの言葉を引用し、聖レオナルがイエスの言葉に忠実であることを明示する。この第一位格と第二位格に関する一節は、ニケーア公会議など古代の公会議以来、激しく争われた末に確立した正統的とされる叙

述を想起させる。

次に先に考察した第一位格と第二位格の二つと、第三位格の關係に関する叙述ついて考察したい。第一位格と第二位格の一體に関する聖レオナルドの信仰をイエスの言葉を通じて明示した後、今度は聖レオナルドの言葉によつて第一位格と第三位格の一體に関する聖レオナルドの信仰について『聖レオナルド第一伝記』では次の如く記されている。

父なる神よ。あなたの名において聖霊とともにあなたに私は呼びかけ、私の哀願の聞き届けられるべき声のために、つねに私を聞き届けてくださるいつもの慈悲深さによつて、早く聞き届けてくださるあなたが居てくださるようには、心から私レオナルドは懇願する¹⁶。

『聖レオナルド伝』の「父なる神よ。あなたの名において聖霊とともにあなたに私は呼びかけ」(in cuius nomine te, Deus Pater, cum Spiritu sancto invoco) という一節では、第一位格と第三位格の關係が述べられている。続いて、各位格の相関關係に関する叙述を取り上げたい。

神よ。あなたは、聖霊と共に働いて、あなたの内奥からあなたの息子をけがれなき乙女の胎へと送った。彼女のなかで神は人となるためであり、人の法則で妊娠している人の体内に隠れるためであり、そしてさらに決まった月日の九か月の後、母なる乙女が生んだとき、部屋から出て来るように生まれることによつて、乙女の母胎をあとに残して去るためであつた¹⁷。

第一位格と「聖霊と共に働いて」(cooperante Spiritu sancto)、すなわち第三位格が協働して受肉が成就することを、「あなたの息子をけがれなき乙女の胎へと送った。彼女のなかで神は人となるためであり」(Puo

misisti Filium tuum ad interneratae virginis uterum, ut in ea Deus fieret homo) という表現で『聖レオナルド第一伝記』は記す。この一節では、第一位格と第三位格の協働による受胎についての聖レオナルドの考えが表明されている。次の箇所でも各位格の相関関係について述べられている。

それゆえ、全能の父よ。私はあなたの一人子と聖霊を通して請い求める。生むことの苦しみの前でうめいているこの王妃にあなたの慈悲深い助力があらわれるように。王妃が差し迫った危険から解放されて、私たちとともにあなたの名を賛美することができるよう。そしてあなたの名は世々に祝福されるからです¹⁸。

「全能の父よ。私はあなたの一人子と聖霊を通じて」(*omnipotens Pater, per unicum Filium tuum simulque etiam per Spiritum sanctum*) という表現で神と子と聖霊という各位格の相関関係について語られている。第二位格は一人子と表現されている。聖レオナルドは、第二位格と第三位格に働きかけて第一位格に請い求めるのである。

上述の文書の「あなたの慈悲深い助力」(*tuae pietatis auxilium*)とは神の奇蹟を意味する。奇蹟は神の御業とするヒツポのアウグスティヌスの定式と古代の教会の公会議の決定はこの文書で結び付けられている。

第三章 聖人の執り成し

一神教における奇蹟の位置づけ(第一章)と、位格の相関関係に関する叙述(第二章)について史料に基づき考察してきたが、本章ではそれらを踏まえたうえで、その枠組みに聖レオナルドが如何に位置づけられている

るかという点を検討したい。

『聖レオナルド第一伝記』の「私の祈りはあなたの視界に入るように。最も慈悲深い方よ。私の祈りにあなたの耳を傾けて下さい¹⁹⁾」という文書が示す如く、聖レオナルドは唯一全能の神に祈りを捧げる存在であり、神の前では信徒に過ぎない。それでは一体、聖レオナルドの存在意義は如何なる所に存するのであるのか。彼は神に愛された人物であるがゆえに、特殊な役割を担う。『聖レオナルド伝』の次の一節はそれを示す。

なぜなら神の憐みは、神の愛するレオナルドの介在によって、瀕死の女王を直ちに救い、そして彼女が腹の中に持っていた子供が生まれるとき、すべての病から解放されることを命じた²⁰⁾。

上述の「神の愛するレオナルドの介在によって」(*interventu dilecti sui Leonardi*)とてう表現が示すように、聖レオナルドは神と人の間に立つ仲介者なのである。仲介者としての執り成しの能力ゆえに聖レオナルドの存在意義は高められる。『聖レオナルド伝』には上述の如く人々の願いを神に執り成すことによって治癒と安産の奇蹟が起る場面が描写されているが、奇蹟は「神の憐み」(*divina Misericordia*)であって、奇蹟は聖人に帰属するのではなく、神に帰属すると明言されている。

聖レオナルドの執り成しによって、唯一全能の神が奇蹟を起こすことが、次の如く明確に表現されている。

それから王とすべての戦士あるいは王の側近は、手を天に伸ばし、全能の神を祝福した。神の僕レオナルドを通して神はこれほど明白な奇蹟を行ってくださった²¹⁾。

「全能の神を」(*omnipotentem Deum*)という表現が示す如く、一神教の枠組みのなかに聖レオナルドは位置づけられている。それを可能にするのが、執り成しの役割という位置づけであろう。だが聖レオナルドは

単なる仲介者ではなく、「神の僕レオナルドを通して」(sper servum suum Leonardum) という表現が示す如く、あくまでも神の僕として使える身分なのであり、執り成しを行うが「神の僕レオナルドを通して神はこれほど明白な奇蹟を行ってくださった」(qui per servum suum Leonardum tam insigne dignatus est operari miraculum) という一節に記されているように、この聖人自体は奇蹟を起す主体ではない。

『聖レオナルド第二伝記』の次の抜粋から、これまで述べてきた一神教における奇蹟の位置づけ(第一章)と位格の相関関係に関する叙述(第二章)と聖人の執り成しの機能に関する叙述(第三章)をすべて矛盾なく接合する努力の跡が看守される。

実にその教会のなかで、神の奇蹟が生ずる。例えば目の見えない人々は光が与えられ、レプラ患者は清められ、麻痺した人々は癒され、そして人々の様々な病は彼レオナルドの執り成しによってその同じ場所で癒される。父と聖霊とともに、すべての世々にわたって生き、支配する私たちの主イエス・キリストの臨在のもとに²²。

上述の文書に於いて奇蹟の位置づけについては「神の奇蹟が生ずる」(divina sunt miracula) という明確な記述が見受けられる。位格の相関関係に関する叙述については、「父と聖霊とともに」(cum Patre et Spiritu) 及び「私たちの主イエス・キリストの臨在のもとに」(praestante domino nostro Iesu Christo) という表現であらわされている。聖人の執り成しの機能に関する叙述については、「彼レオナルドの執り成しによって」(per intercessionem eius) と明示されている。以上の如く、『聖レオナルド第一伝記』の叙述によってレオナルド崇敬は古代の公会議の決定とアウグスティヌスの奇蹟の定式に完全に合致していることが証明されている。カ

ペー朝がイル・ド・フランス周辺にしか影響力を行使しえぬほどに弱体であった時期に教会権力は古代の公会議と教父のドクトリンを王朝の辺境地にまで貫徹させる努力を怠らなかつたことのひとつの証拠を『聖レオナルド第一伝記』は我々に与えてくれる。

おわりに

参事会教会の聖人崇敬の当該管区による認可の文書としての『聖レオナルド第一伝記』の分析を通じて、不安定な社会情勢のなかでさえも、古代の公会議や教父のドクトリンの遵守は徹底されたことを明らかにした。その筆致は私有教会制下の封建領主たちを威嚇し、その恣意的な振る舞いを戒めるかの如き厳格さを備えていたといえよう。紀元千年頃の王権のヘゲモニーが及ばずフェーデが横行する南西フランスの封建社会のなかで *Societas christiana* の秩序の安定化に対して参事会教会の果たした役割は極めて大きいと言わなければならぬであろう。

最後に聖人伝史料の可能性について附言したい。この種のドクトリンの問題を除去して歴史的事実を抽出し、党派的表现に目を向けて考察したのが、拙稿「『聖レオナルド』(一一世紀前半)の成立…神の平和運動とのかかわり」であった²³。本稿では逆に司教権による列聖(聖人認定)²⁴に向けて古代の公会議や教父のドクトリンに忠実に依拠して編纂された聖人伝の厳格な構造について集中的に検討し、古代の公会議以来の伝統墨守の保守性と現実世界の権力関係に向き合った独創性という西欧中世の聖人伝の二面性の併存について考察した。西欧中世の聖人伝は様々なレベルの言説から成る重層的構造を持つ編纂物であるというひとつの証拠を『聖レ

オナール第一伝記』の分析はあらためて我々に教えてくれる。聖人伝の多面的な読み方は、今後一層、叙述史料の可能性を広げ、歴史学の進展に寄与するであろう²⁵。

〔付記〕本稿は在地の政治的利害の結節点としての列聖の国制的意義の解明を目的とした「SPS科研究費研究プロジェクト（課題番号20K01068）「中世盛期の西南フランスにみる列聖の国制的意義」の研究成果の一部である。

註

- 1 F. Arbellot, *Vie de S. Léonard, solitaire en Limousin*, Paris, 1883; B.Barrière (dir.), *Saint Léonard de Noblat*, Limoges, 1995.
- 2 Y. Chiron, *Enquête sur les béatifications et les canonisations*, Paris, 2011.
- 3 聖レオナルドの伝記は複数の版が存在する。Cf. Société des Bollandistes(éd.), *Bibliotheca hagiographica latina antiquae et mediae aetatis*, K-Z, vol.III, Brussels, 1900-1901. 本稿で取り上げるのは、その最初に編纂された伝記である。他と区別するため本稿では『聖レオナルド第一伝記』と表記する。Société des Bollandistes (éd.), *Vita S. Leonardi Nobiliacensis, Acta Sanctorum Bollandiana* (Nov.) 3, Brussels, pp.149-155. ドイツ語版 Vita への略記である。
- 4 中世初期までは聖人伝の希少な写本を手にとって読むことのできるものは、特権的な読者であったが、一二世紀にグレゴリオ会士ヤコブス・デ・ヴォラギネが説教のために聖人伝の抜粋の書『黄金伝説』*Legenda aurea*を編纂して以降、聖人伝は少なくとも聖職者の世界ではかなり身近な存在となった。イエズス会創設者イグナチウス・デ・ロヨラの靈感源となったのは、『黄金伝説』の靈的読書であったことはよく知られている。
- 5 Cf. Vita. prologus.
- 6 列聖手續きについては、ルートヴィヒ・ヘルトリング(渡邊浩訳)「翻訳 ルートヴィヒ・ヘルトリング(イエズス会)『列聖手續きの歴史に関する諸問題』」『紀要』第一九号、藤女子大学キリスト教文化研究所、二〇二〇年、一七―四九頁参照。
- 7 R.landes, *Between Aristocracy and Heresy: Popular Participation in the Limousin Peace of God, 994-1033*, dans T.Head, R. Landes(ed.), *The Peace of God : social violence and religious response in France around the year 1000*, Ithaca, NY, 1992, pp.184-218.
- 8 R.limouzin-Lamothe, *Le diocèse de Limoges des origines à la fin du Moyen âge*. (Collection d'histoire des diocèses de France publiée sous la direction de l'abbé Jarry) Strasbourg-Paris, 1951; M. Aubrun, *L'ancien diocèse de Limoges des origines au milieu du xie siècle*, Clermont-Ferrand, Institut d'Études du Massif Central, 1982.
- 9 拙稿『聖レオナルド伝』(一一世紀前半)の成立・神の平和運動とのかかわり』『愛大史学・日本史学・世界史学・地理学』第三〇号、二〇二一年、五五―七八頁に所収。

- 10 上掲論文参照。
- 11 アウグスティヌス (服部英次郎、藤本雄三訳) 『神の国』 (五) 岩波文庫、一九九一年、四一四-四一五頁。
- 12 前掲書、四一五頁。
- 13 Igitur quia lux latere in tenebris nequit, sicut dixit Scriptura, et non potest abscondi civitas super montem posita, licet sanctus Dei multitudinem populi aufugerit et solitariam vitam, sicut saepe propalatum est, adamaverit, tamen quia gloriosus est Deus in sanctis suis et per eos in gentibus facit mirabilia, divina instigatione conveniebant ad eum infinita debilium agmina; (Vita.Ch.11)
- 14 quae per suum fidelem curabat omnipotentis Dei gratia. Extendebatur etenim nomen sanctitatis eius per totam Aquitaniam, nec minus per omnem Britanniam, transgrediens etiam adusque Germaniam. (Vita.Ch.11)
- 15 Tu enim per sacratissimum os filii tui domini nostri Iesu Christi duodecim apostolis ceterisque fidelibus christianis inquiringis promisisti: Quodcumque petieritis Patrem in nomine meo, dabit vobis; (Vita.Ch.7)
- 16 in cuius nomine te, Deus Pater, cum Spiritu sancto invoco et ad exaudiendam vocem deprecationis meae solita clementia, qua me semper exaudis, quatenus velox et exaudibilis adsis, suppliciter obsecro. (Vita.Ch.7)
- 17 qui etiam, cooperante Spiritu sancto, de sinu tuo misisti Filium tuum ad intemeratae virginis uterum, ut in ea Deus fieret homo et humana lege in praegnantis lateret domo atque etiam post novem mensium legitimum numerum, matre virgine pariente velut e thalamo procedens nascendo virginis relinqueret uterum; (Vita.Ch.7)
- 18 peto itaque, omnipotens Pater, per unicum Filium tuum simulque etiam per Spiritum sanctum, ut huic prae angustia pariendi ingemiscenti reginae superveniat tuae pietatis auxilium, quatenus ab instanti periculo liberta possit nobiscum glorificare nomen tuum, quod est benedictum in saecula saeculorum. (Vita.Ch.7)
- 19 Intret oratio mea in conspectu tuo; inclina aurem tuam, piissime, ad preces meas. (Vita.Ch.7)
- 20 Nam divina Misericordia interventu dilecti sui Leonardi moribundae reginae ilico subvenit et nascente, quam in utero habebat, prole, ab omni languor liberam esse praecepit. (Vita.Ch.8)

- 21 Tunc rex omnesque milites sive famuli eius tetenderunt manus ad caelum et benedixerunt omnipotentem Deum, qui per servum suum Leonardum tam insigne dignatus est operari miraculum. (Vita.Ch.8)
- 22 In qua quidem ecclesia divina fiunt miracula: nam caeci illuminantur, leprosi mundantur, paralytici sanantur, varique hominum languores per intercessionem eius ibidem curantur: praestante domino nostro Iesu Christo, qui cum Patre et Spiritu sancto vivit et regnat per omnia saecula saeculorum. Amen. (Vita.Ch.14)
- 23 『愛大史学：日本史学・世界史学・地理学』第三〇号、二〇二一年、五五―七八頁。
- 24 教皇権による列聖については大まかな全体像がまとめられている。 Cf. G. Fontanini, *Codex Constitutionum quas summi pontifices ediderunt in solenni canonizatione sanctorum a Johanne XV. ad Benedictum XIII. sive ab A. D. 993 ad A. D. 1729. Rom camera apostolica. Rome. 1729*. 一方で目下のところ司教権による列聖（聖人認定）については諸事例に関する個別研究に依拠するほかなく。
- 25 古典的な研究としては、A. Vauchez, *La sainteté en Occident aux derniers siècles du Moyen Âge (1198-1431)*, Rome, École française de Rome, 1981. 模範としての聖人伝という古典的なテーマだけでなく、今日では多様な問題意識の下に聖人伝史料が活用されるようになった。